



陳言コラム-8

中国雑談

中国の「村名パスワード」

昨年、43年ぶりに文革中に下放された河南省修武県大衛村に行ってきた。

当時、父が木製のリヤカーを引き、小学生だった私も皮で作った縄で一所懸命引いた。大衛村から修武県までの15キロを片道4時間かけて歩いた。帰りもリヤカーに乗れなかった。荷台で寝ている二歳下の弟をうらやましく見ていた。

今回は県から村まで15分もかからずに村に到着した。大衛村の隣には小衛村があり当時、父がそこで思想改造を受けていた。かつて、かつて大衛村から小衛村までの途中に深さ2メートルぐらいの溝があり、またお墓があつて、そばにそそり立つ奇怪な形をした木が怖かった。しかし、いまその面影はすっかり消えていた。

北方の村名は姓が多い

後に大学で歴史を勉強して、紀元前1000年頃、「衛」という国がほぼ今日の河南、河北省あたりにあり、今日「衛」という地名に残しているのは、私たちが下放された大衛村ぐらいだと知り、びっくりした。ただ、ここには衛と名乗る人がほとんどいなくなり、許、崔という姓の人ばかりとなっている。

今思うと、華北、華東から中原と呼ばれた地域には、同名の村がたくさんある。区別するために「大衛村」「小衛村」と呼び、農民は今でも典型的な農耕生活を送っている。地理や景観に変わりがなく、伝統的な価値観も似通っている。こうした村に住む人々は、自分の存在価値を強調するため、また一族の結束を固め、自らを保護するために、自分たちの姓を村名にしてきたことが非常に多い。

下放で知ったのは、河南省には別の姓の村との間に心理的な溝や対立が歴史として延々と残っていることだった。村名に使われている苗字の2人が対立しただけで、村と村の対立と見なされてしまうことが少なくなかった。村同士の問題だけでなく、家同士の関係に



も影響を与えた。村内で少数派の苗字の人々が孤立し、私たちのような下放された人々がいじめられることも珍しくなかった。

素養感じさせる南方の村名

この前のコラムで紹介したように私の本籍は上海だが、南方では、自然や景観から命名した村名が多い。たとえば、崇明県には「永鳳村」、「春風村」という村があり、また東西南北、上下、前後左右などが使われるケースが多く、「南門村」、「東河沿村」といった具合だ。さらに地域の代表的な景観や土地柄など、地理的な特性から命名されたケースとして、「城橋村」、「米行」、「井亭村」などがある。私は昔、山口県萩市の「米屋町」に住んだことがあるが、中国語に訳すと「米行」だろうか。また、文革中に人口が増加し、村の数も多くなったが、時代を反映した「向陽」、「衛星」、「躍進」などの新しい村名も登場した。

村名に氏姓を使っている地域の多くは、古代に戦争が繰り返され、文化的な衝突も激しく、民族移動が頻繁だった。その地にある歴史的建造物などの物質的な文化財は、長期間の保存に耐えられず、宗族の記憶として残っているだけだ。

これに対して、自然地理命名方式は、中国人、特に古代中国農民が大自然と融合して暮らしていた当時の雰囲気而今に伝えている。崇明の農村ではほかには「観潮新村」、「桃源」といった村名を見聞きすると、心の底からある種の感動が沸き起こる。これこそが古代の理想の郷土社会であり、多くの中国人が今日に至るまで、自然に対する審美眼を保ち続け、生命の本質のありかを感じる源泉であろう。

陳言 日本語日刊紙『速読中国』編集長。

連絡先: chenyan@seapush.com